

# リスクとは何か、リスク社会とは何か —ウルリヒ・ベックのリスク社会論(1)—

## What is Risk, and What is Risk Society? —A Study of Ulrich Beck's Theory of Risk Society (1)—

飛田 満  
Mitsuru TOBITA

*Keywords* : Ulrich Beck, modernization, risk society, class society

キーワード：ウルリヒ・ベック、近代化、リスク社会、階級社会

### 1. はじめに

リスク社会とは、さしあたり「グローバル規模で生命を危険に曝す次元にまでリスクが達し、生活環境や社会の発展にますますリスクが影響を与えるようになる社会」のことをいう。<sup>(1)</sup>放射能、化学物質による環境汚染、地球温暖化、生物多様性の危機、テロリズム、金融危機など、様々な「リスク」に曝されている現代社会は、まさに「リスク社会」であると言えよう。この概念は、ドイツの社会学者ウルリヒ・ベックが、1986年に公刊した著作『リスク社会』（邦訳は『危険社会』）の中で初めて取り上げ、しかもその同じ年にチェルノブイリ原発事故が発生したこともあって、人々に強い衝撃を与え、広く流布するようになったものである。

ウルリヒ・ベック（Ulrich Beck, 1944～）は、ミュンスター大学、バンベルク大学教授を歴任し、1992年から2009年まで母校のミュンヘン大学教授、さらにロンドン・スクール・オブ・エコノミクス客員教授として社会学の講座を担当した。またドイツで主要な社会科学の学術誌“*Soziale Welt*”の編集主任、バイエルン州、ザクセン州の政府審議会委員、さらに2011年には、政府の「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」委員も務めた。現代ドイツを代表する社会学者、とくにリスク社会論の第一人者である。

ベックの『リスク社会——新しい近代への道』は、学術書としては珍しくベストセラーとなった。出版後5年間で6万部を売り上げ、2012年にはすでに第21版を重ねている。<sup>(2)</sup> 英訳書の解説によれば、本書は「社会分析の分野で、20世紀後半において最も影響力のあったヨーロッパの著作の一つ」である。<sup>(3)</sup> たしかに本書の公刊とチェルノブイリ原発事故がほぼ同時的であったため、本書は当時急速かつ広範に受容されたことも事実であるが、しかし本書は結果的に、長期に亘って大きな影響を与え続けた。本書は「時代の診断として依然としてセンセーシヨナ

ルで、大胆で、卓越し、傑出し、際立ったものとして、またとくに永続的なものとして時代の感覚に的確なものとして認められた」と、ディルク・ケスラーは論評している。<sup>(4)</sup>

ところで、ベックの『リスク社会』は、原題では“Risikogesellschaft”（英訳では“risk society”）であるが、邦訳書ではこれが『危険社会』と訳されている。ドイツ語には「リスク」と訳される“Risiko”（英語では“risk”）という言葉とは別に、「危険」と訳される“Gefahr”（英語では“danger”）という言葉がある。邦訳書の説明では“Risiko”を「危険」と訳した理由として、ベック自身が“Gefahr”を“Risiko”から必ずしも区別して用いてはおらず、むしろ“Gefahr”を“Risiko”の意味で用いていることと、日本語の「リスク」という言葉が、企業や個人の経済面の損害の可能性を意味する場合が圧倒的で、環境問題ではほとんど用いられないことが挙げられている。<sup>(5)</sup>

このうち、第二の理由に関しては、例えば地球温暖化のリスクや原発事故のリスクについて、ここ数年来盛んに議論されていることから、今日では少し状況が変わってきているように思われる。しかし第一の理由に関しては、たしかにベック自身、“Risiko”と“Gefahr”およびその派生語の“Gefährdung”を、①二語一想的に並べたり、②説明的に言い換えたり、とくに区別していないように思われる。例えば、

- ①-1 「危険とリスク（Gefährdungen und Risiken）の存在と分配は、原理的に論証を介して伝えられる」。
- ①-2 「知覚できないリスク（Risiken）を無視する姿勢こそ、リスクと危険（Risiken und Gefährdungen）が花開き、成長し、繁栄するところの文化的・政治的な基盤である」。
- ②-1 「産業社会は自らが解き放ったリスク（Risiken）を経済的に利用することによって、リスク社会（Risikogesellschaft）の危険な状況（Gefährdungslagen）と政治的な潜在的可能性を作り出す」。
- ②-2 「危険（Gefährdungen）が増大しているにもかかわらず、その危険が政治的にリスク（Risiko）の予防的な解決策に活かされていない」。<sup>(6)</sup>

見られるように、逐語的に「危険」と「リスク」として訳し分けてみたが、実際には「危険」も「リスク」と訳した方が、一貫性があると思われる。

とはいえ「リスク」も「危険」であって、ともに「誰かに何か（危害や損失）が生じる可能性」を意味するが、若干ニュアンスの違いがあるように思われる。すでに邦訳書の説明でも示唆されているが、危険（Gefahr）とは、例えば天災のように、人間の営みや企てとは無関係に起こるもの、人間に外から襲いかかるものである。これ対してリスク（Risiko）とは、例えば事故のように、人間の営みや企てに伴って起こるもの、人間に責任が帰せられるものである。リスクとは言わば、人間が危険と立ち向かうために作り出した第二の危険である。大きく言えば、社会の発展から生まれ、社会の発展とともに拡大し、ついには社会そのものを脅かすようになった危険、すなわち近代化の副産物としての危険、近代化に伴う危険である。以上のことから、やはりベックの文脈では、“Risiko”は「リスク」、「Risikogesellschaft」は「リスク社会」

と訳すべきであろう。

小論の目的は、この『リスク社会』の第一部第一章「富の分配とリスクの分配の論理」に拠りながら、まずもってベックの「リスク社会」の輪郭を描き出すことである。すなわち、近代化に伴うリスク（Modernisierungsrisiken）とはどのようなものか、そのようなリスクに曝されるリスク社会とはどのようなものか、リスクとは社会でどのように生産され分配されるのか、その社会における科学の役割や階級的分化はどうなっているのか、そして地球の規模で拡大するリスクがもたらす社会的連帯とはどのようなものか、ベックの行論に従って考察していきたい。

## 2. リスクの生産と分配

ベックによれば、近代化の進展の中でシステムの・構造的に「富の社会的生産」に伴って「リスクの社会的生産」が生じる。階級社会における富の分配問題と争いに加えて、リスク社会におけるリスクの分配問題と争いが生ずる。「システムの論じるならば、社会史的に見て遅かれ早かれ、近代化の過程の延長線上で、富を分配する社会の状況とそこでの争いと、リスクを分配する社会の状況とそこでの争いは交錯する。ドイツでは——これは私〔ベック〕のテーゼであるが——遅くとも70年代以降にこうした移行が始まった」。(7)

産業社会あるいは階級社会（Industrie- oder Klassengesellschaft）といった（マルクス＝ヴェーバー的）概念は、社会的に生産された富がいかにして不平等に、しかも同時に合法的に分配されうるかという問題に関わっている。ベックによれば、リスク社会においては、こうした産業社会における問題とよく似ているが、全く別種の問題の解決が中心に据えられる。すなわち、近代化過程が進展した場合、システムの付随して生産されるリスクをいかにして阻止し、無害と見せかけるか、またひとたびリスクが「潜在的副作用」という形で脚光を浴びた場合、そのリスクをいかにして最小限にとどめ、許容量の限界を超えないようにするか、といった問題である。

リスクは決して近代の産物ではない。近代以前にもリスクは多く存在した。しかし近代化に伴う今日の文明社会のリスクとそれ以前のリスクとの間には、ベックによれば、次のような違いがある。第一に今日のリスクは、放射性廃棄物によって発生する危険性のように、人類全体に対するリスクであり、地球上の全生命をも脅かす包括的なリスクである。第二に今日のリスクは、放射線や食品に含まれる有害物質のように、通常は知覚できず、むしろ化学的・生物学的記号の形でしか認識できないようなリスクである。第三に今日のリスクは、産業化のメカニズムによっていやおうなく一括してもたらされ、産業化の進展とともにシステムの先鋭化するようなリスクである。

このように文明によって自らを潜在的にリスクに曝している社会の構造と政治の力学が本論の中心テーマとなる。ベックは、先回りして本論の概略を5つのテーゼの形で述べている。それによると、

- ① 生産力の発展の最も進んだ段階で生じるリスクとして考えられるものは、まずなによりも人間が直接知覚できない放射線であり、また空気・水・食品などに含まれる有害・有毒物質である。そのリスクは目には見えないが、因果的解釈に拠っている。リスクは最初それをめぐる知識の中にだけ作り出される。リスクは知識の中で加工され、過大あるいは過小評価される。その限りでリスクとは「社会的な定義づけ」が可能なものである。
- ② 近代化に伴うリスクは階級の図式を破壊する「ブーメラン効果」を内包している。富裕な者も、権力を有する者も、リスクの前に安全ではない。しかもそのリスクは健康に対する危険性としてだけでなく、利益や所有や権限に対する危険性としても現れる。近代化に伴うリスクが社会的に認知されると、生態学的な価値は失われ収用される。リスクは多様かつ組織的に産業化過程を推し進めてきた利害関係や所有関係と矛盾するようになる。同時にリスクは新たな国際的不均衡を、途上国と先進国との間にも先進国相互の間にも作り出す。
- ③ リスクが蔓延し市場で取り引きされるようになると、リスクは資本主義的な発展の論理から切り離されるのではなく、むしろその論理を新たな段階へと押し上げる。近代化に伴うリスクはビッグ・ビジネスとなる。リスクは経営者が探し求める無限の需要となる。文明に伴うリスクは、底なしの閉めることのできない、限りなく自己増殖する「欲望の桶」(Bedürfnis-Faß)である。
- ④ 単純に図式化すれば、階級社会においては存在が意識を規定するが、リスク社会においては意識が存在を規定する。知識が新たな政治的意味を獲得する。したがってリスク社会のもつ政治の潜在的可能性が、リスクをめぐる知識の発生と拡大を研究対象とする社会学理論によって分析され解明されなければならない。
- ⑤ 社会的に認知されたリスクはそれ固有の政治的紛争の火種を抱えている。それまで非政治的なものと見なされてきたものが政治的なものとなる。自然と人間に対する健康上の影響という問題だけではない。このリスクの有する副作用、すなわち市場の暴落、資本の無価値化、企業的意思決定に対する官僚による統制、新たな市場の創出、莫大な費用、訴訟手続き、面目の失墜など、社会的・経済的・政治的な副作用もまた問題となる。<sup>(8)</sup>

### 3. 自然科学的な環境評価の問題点

空気・水・食品などに含まれる有害・有毒物質をめぐる議論は、もっぱら自然科学上の(化学的・生物学的な)カテゴリーと数式によって行われている。それは一般に自然破壊や環境破壊をめぐる議論も同様であるが、この種の議論にあっては、そうした自然科学上の「劣化を示す数式」が、社会的・文化的・政治的な意味を有していることが認識されていない、とベックは批判する。

例えば、空気・水・食品などに含まれる有害・有毒物質の分配と負荷についての分析・調査が行われ、その結果が地域的に色分けされ表示された「環境地図」という形で、公衆の前に呈

示される。このようにして、環境の状態が表示されれば、その表し方や考え方は表面的には適切であると見なされる。しかし、そこから人間に対する帰結を引き出すとすれば、そこで前提となっている思考は短絡的 (kurzschlüssig) である。というのは、同一の有害物質が、同一の地域であっても、年齢・性別・職業・収入・教育と、それに関連する食習慣や住環境などの点で、異なった人間に対しては、異なった意味を有しうることが見落とされがちだからである。

とくに重大な問題としてベックが指摘しているのは、個々の有害物質について行われる研究にあっては、人間においてどれだけ有害物質が蓄積しているかを測定しえない点である。ある有害物質は個々の食品に関しては「心配ない」(unbedenklich) 濃度かもしれないが、数種の有害物質により合成された食品を摂取する「末端消費者という汚水溜め」(Sammelbecken des Endverbrauchers) においては、きわめて「憂慮すべき」(bedenklich) 濃度になるかもしれない。いずれにせよ、私たちは空気中の有害物質を吸い、水中の有害物質を飲み、野菜その他の中の有害物質を食べている。とすれば、さして「心配ない」ものであっても、累積すれば「憂慮すべき」危険なものになるかもしれない。<sup>(9)</sup>

#### 4. 近代化に伴うリスクと科学的知識

##### (1) 因果関係の推定とインプリシットな倫理

例えば「ノイベアラッハ近郊に住む母親の母乳から残留農薬が検出された」という単なる事実を述べても、文明がリスクに曝されている状況を言い表すには十分ではない。しかしこうした仕方でも、この母親は農薬を生産している化学薬品会社と関係し、また農薬を多用する農法を強いられている農民とも関係しているとすれば、この事例は二つのことを示している。すなわち、第一に近代化に伴うリスクは、限定された地域の現象であると同時に、限定されない普遍的な規模の現象でもある。第二に近代化に伴うリスクは、予測することも予見することもできず、複雑な過程を経て被害を与え影響を及ぼす。つまり、近代化に伴うリスクにあっては、内容的にも事象的にも、空間的にも時間的にも別々に起こった現象が、因果的に関連づけられ、同時に社会的・法的な責任関係に持ち込まれる。

ところが、こうして社会的に切り離されていた現象を因果的に結びつけたとしても、ベックによれば、まだ十分ではない。リスクに曝されていることを体験的に確認するためには、理論的な要素 (因果関係の推定) だけでなく、さらに安全性が失われ信頼性が裏切られるという規範的な要素 (インプリシットな倫理) が前提とされる。リスクを確認するということは、倫理が哲学や文化や政治とともに、近代化の中心であった経済や自然科学や技術の分野で再興されるような事態をいう。リスクが確認されるためには、科学者、市民団体、政治家、行政、企業などの分野間の溝を埋めて協力することが前提とされる。

##### (2) 科学的合理性と社会的合理性

なにごとをリスクかを定義する場合に、合理性 (Rationalität) という概念が用いられるが、この合理性を科学が独占するという状況は崩壊した。例えば、原子炉の安全性に関する研究は、想

定される事故に基づいて、数量化可能な特定のリスクを推定することに限定されている。つまり、推定されるリスクの規模は、最初からすでに技術的に処理可能なレベルに制約されている。これに対して、住民の多くや反原発論者が中心問題に据えるのは、大災害をもたらすかもしれない核エネルギーの潜在能力そのものである。さらに公衆の議論において問題化されるのは、当面のリスク研究においては全く論じられない性質のリスクである。例えば、核兵器の拡散や、人的なミスや、何万年という長期にわたる影響など、これらは将来世代の生命をもてあそぶものである、とさえバックは言う。

こうしてリスクをめぐる議論のなかで際立ってくるのは、「科学的合理性」と「社会的合理性」との間の断絶である。一方では質問が出されても質問を受ける側がそれに全く答えないとか、他方では答えが与えられても核心に触れない的外れな答えであるとか、そこでは話が噛み合わない。こうして科学的合理性と社会的合理性は、なるほど相互に対立してはいるが、しかし同時に絡み合い依存し合っている。それどころか両者の区別はますます難しくなっている。産業化に伴う様々なリスクに取り組む科学は、社会的な期待や価値観を拠りどころとするし、また逆にリスクを認識しこれと対決する社会は、科学的な根拠に依存している。カントを捩って言えば、「社会的合理性なき科学的合理性は空虚であり、科学的合理性なき社会的合理性は盲目である」。(10)

### (3) リスクの定義の多様性

リスクの理論的内実やリスクと価値観との関係を規定するものとしては、こうした科学的合理性と社会的合理性との対立のほかにも次のような要因が挙げられる。すなわち、リスクは対立し合って「多元化」するとともに、なにがリスクかの定義もまた「多様化」ということ、さらに、リスクが言わば過剰に生産されるとともに、リスクが「相対化」され「ランク付け」されるということである。こうしてだれもがそれぞれの利害関心に基づいてリスクを定義することで、自分の身を守り、自分の経済的負担となるようなリスクを排除しようとする。

例えば、森林破壊をめぐる、企業は世論の圧力を次のような仕方で斥けようとする。すなわち、リスクを生み出した者として突然に公然と非難された企業は、すでに企業内部で組織化されつつある「対抗科学」をもって、自らを非難することへと結び付ける論証にできる限り抵抗し、他の原因と張本人を担ぎ出そうとする。産業界では、次にだれがエコロジーの倫理に反したかどで追放されるか分からないという不安が高まっている。優れた論証、あるいは少なくとも世の中に通用する論証を持つことが、企業が成功するための条件になる。要するに、「なにがリスクかを定義することによってどれだけ社会的な影響を及ぼすかは、それが科学的にどれだけ裏づけられたものかということには拠っていない」。(11)

それだけではない。発達した市場社会としてのリスク社会では、リスクが単にリスクであるだけでなく、ビジネス・チャンスでもあるという二重の顔をもっている。つまり、リスク社会が拡大するにつれて、リスクから被害を受ける者と、リスクから利益を享ける者との対立が拡大する。リスクが増大するのと同じように、知識がもつ社会的・政治的な意義もまた増大する。

と同時に、知識を形成する手段（科学・研究）や知識を伝播する手段（マスメディア）を駆使することもまた増大する。「この意味でリスク社会とは、科学社会・メディア社会・情報社会（Wissenschafts-, Medien- und Informationsgesellschaft）でもある」。<sup>(12)</sup>

## 5. 階級に特有のリスク

階級社会とリスク社会の間には重なり合う点が多い。リスクの分配は富の分配と同様に、階級という図式に従っている。ただし、富が上層に集中するのに対して、リスクは下層に集中するという関係がある。その限りでリスクは、階級社会を解体させずに強化させている。下層階級にあっては、生活が困窮していることに加えて、安全性が脅かされ、回避すべき危険に溢れている。これに対して、収入や権力や教育のある豊かな人々は、安全性とリスクからの自由を金で買うことができる。階級に特有なこうしたリスクの分配法則と、貧しい人々にリスクが集中することによって階級間の対立が先鋭化する傾向は、すでに以前から見られたが、今日でも主要なリスクの場面に認められる。

例えば、就業中にストレスを受けたり、放射線を浴びたり、中毒になったりするリスクは、職種によって不平等に分配されている。また低所得者層のための安価な居住地は、工場集積地の近くにあり、その住民は大気・水・土壌などに含まれる様々な有害物質の汚染に絶えず曝されている。危険な状況を回避したり、埋め合わせたりする可能性や能力も、所得や教育のレベルが異なる各層に平等には分配されていない。例えば、新聞やテレビで報道される食品の有害性に関する記事やニュースに対する反応は、各階層によって異なっている。ここに例えば、階層に特有に分配された「反化学物質的」な食習慣や生活習慣が生まれることも容易に想像することができるであろう。

ここから、まさにこうした教養があり経済力があるリスクへの対処法によって、旧来の社会的な不平等は新しいレベルで強化される、という一般的な評価を導き出すこともできる。ところがこの評価は、ベックによれば、「リスクの分配論理」の核心を突いてはいない。というのは、危険な状況が先鋭化するにつれ、個人の側でリスクを回避する道や埋め合わせる可能性は減少するからである。たしかに若干の食品に対しては、個人的に策を講じることも有効であるが、しかし水や空気の汚染や環境破壊となると、それが広域のものになるほど、階級に特有の壁は崩れ落ちてしまう。<sup>(13)</sup>

## 6. 地球的規模で拡大するリスク

### (1) ブーメラン効果

公式的に言えば、「貧困は階級的であり、スモッグは民主的である」。<sup>(14)</sup> 近代化に伴うリスクが拡大するとともに、自然や健康や食生活などがリスクに曝されることで、社会的な差異や格差は相対的なものとなる。リスクはそれが及ぶ範囲内では客観的に広がり、その影響を受ける人々のもとでは平等に作用する。この意味ではリスク社会は決して階級社会ではない。危険な

状況を階級的状況として捉えることはできないし、危険の対立を階級的対立として捉えることもできない。

近代化に伴うリスクはグローバリゼーション、つまり地球的規模における拡大という傾向を内在させている。工業生産に伴うリスクは、生産の場所とは無関係に、世界的規模で拡大する。かなり以前から酸性雨は、ドイツの彫刻や文化財を侵食するだけでなく、国境を越えて、スカンジナビアの森を枯死させ、カナダの湖の魚を死滅させている。あるいは食物連鎖は、地上のあらゆるものをあらゆるものと結びつけるので、實際上、国境や境界などは意味がなくなってしまう。

ベックによれば、近代化に伴うリスクは、それが拡大する過程において社会的な「ブーメラン効果」(Bumerang-Effekt)を発揮する。このリスクの前には、富める者や力をもつ者といえども安全ではない。リスクを引き起こし、そのリスクから利益を得ている者でさえ、極めて具体的にこの危険の渦の中に巻き込まれてしまう。

農業を例にとると、ドイツでも80年代までに、化学肥料と農薬の使用量が急激に伸びた。穀物やジャガイモの収穫量も伸びた。しかし後者の伸びは前者の伸びを下回っている。これに対して、動植物の種類が著しく減少するなど、自然破壊の増加の程度は化学肥料と農薬の使用量の増加の程度を上回っている。多額の助成金を投入して促進する工業的集約農業が、農業生産そのものの基盤を様々な形で弱体化させている。土壌の生産力が低下し、生活に欠かせない動植物が死滅し、表土の侵食の危険性が増大している。一般化して言えば、近代化に伴うリスクの下では、遅かれ早かれ作為者と犠牲者が一体化することになる。

## (2) 生態学的な価値の低下と収用

ブーメラン効果は、たんに生活や生命を直接脅かすようなものにだけ現れるのではない。金銭・財産・権限といった重要な媒体に絡むものにおいても、ブーメラン効果は現れうる。それは、リスクの原因となった個人に直接的な反作用の形で向かうだけではない。あらゆるものを一括して無差別に巻き添えにする。例えば、森林破壊はあらゆる種類の鳥類を死滅させるだけではない。森林や土地の所有に関わる経済的価値をも減少させる。原子力発電所や火力発電所が建設され、あるいは建設が予定される所では、周辺の土地の価格が下落する。所有地がその生態学的な価値を低められ(entwertet)収用される(enteignet)。

その背後に潜んでいる根本的見方は極めて単純である。すなわち、地球上の生命を脅かすものはすべて同時に、この生命を売り物や食べ物にして生計を立てている者の、所有物や商品化に関わる利益をも脅かす。こうして、利益と所有への関心は確かに産業化の過程を推し進めるが、しかし産業化は様々な面で脅威をもたらし、利益や所有を危険に曝し、その価値を収用することになる。

リスクの原因物質は国境を越えて拡散するため、もはや一国単独で対処することはできない。今後は工業諸国が、その国の「環境汚染の収支状態」(Emissions- bzw. Immissionsbilanzen)によって区別されるようになるだろう、とベックは言う。すなわち、有害汚染物質

から見て「プラス勘定」「ゼロ勘定」「マイナス勘定」といった「国際的不平等」が工業諸国間で生じる。もっとはっきり言えば、「汚染物質を撒き散らす国々」と「他国の汚染の犠牲になってこの汚染物質を吸い込む国々」との間で不平等が生じる。そして後者の国々は「生態学的な価値の低下と収用」という形で、汚染の代価を支払うことを余儀なくされるだろう。

### (3) 新たな国際的不平等

危険な状況は等しく世界に広がる。しかしリスクに曝されることの内部で新たな社会的不平等が発生する。とりわけ国際的規模で階級的状況と危険な状況が重なり合うところに、こうした不平等が発生する。世界中でリスク社会の無産階級は、途上国の工業地帯の林立する煙突の下、精錬所や化学工場の近辺に住み着く。このことは、史上最悪の化学工場事故、インドのボパールで起こった有毒物質による汚染事故によって、世界中の人々の意識に焼きつけられた。<sup>(15)</sup> 危険な産業は労働力の安価な国々へと疎開する。これは偶然ではない。「極度の貧困と極度のリスクとの間にはシステム上の引力が働いている」。<sup>(16)</sup>

目に見える脅威である貧困による餓死と、目に見えない脅威である農薬による中毒死。どちらを取るかという選択においては、後者による前者の克服に軍配が上がる。化学肥料、殺虫剤、除草剤などの化学物質を大量に使用しなければ、田畑の収穫量は落ち込み、農民の取り分は害虫に食われてしまう。化学物質のお陰で周辺諸国は自国の食料の蓄えを増やすことができ、工業諸国の支配から解放されて自立の道を一歩進めることができる、というわけである。しかしその背後では、化学物質の脅威という知覚できないリスクは、とるに足らない問題として片づけられている。こうしてリスクは高まり、拡大し、結果として、食物連鎖を通じて回り巡って、工業諸国にまで跳ね返って来る。

リスクの増大は世界を小さくし、世界をして危険を共有する共同体に変えてしまう。ブーメラン効果が豊かな国々にも影響を及ぼす。先進工業国は危険性の高い工業を発展途上国に移転させることでリスクを遠ざけたが、しかし先進工業国は食料品を発展途上国から安く輸入している。果物、カカオ豆、飼料、紅茶などとともに、輸出した農薬が先進工業諸国へ戻ってくる。周辺諸国の貧しく悲惨な地域が、あたかも豊かな工業地帯の戸口まで押し寄せてきている。<sup>(17)</sup>

## 7. リスクを知覚することとリスクを生産すること

知覚できる富と知覚できないリスクとの間の競争にリスクは勝つことができない。というよりも目に見えるものと目に見えないものとの間では競争にならない。しかし逆説的に言えば、まさにそれゆえにこそ、目に見えないリスクがこの競争に勝つことになる。

いずれにせよ知覚できないリスクを無視することは、知覚できる貧困を取り除くという大義名分の下で、つねに正当化されてしまう。第三世界ではしばしばそのようにリスクを無視することが正当化されてきた。そこではリスクを無視することが文化的・政治的な基盤となり、その基盤の上に、貧困によってその存在を否定されたリスクが、言わば花開き、成長し、繁栄した。とはいえ、リスク社会が目に見えないことはリスク社会の非現実性を証明するものではな

い。それどころか、リスク社会が目に見えないことはリスク社会を発生させる起動力そのものであり、リスク社会が現実化することの証拠にほかならない。

ベックによれば、以上のことは貧しい第三世界においてのみならず、豊かな工業諸国においても見て取ることができる。すなわち、工業諸国において最優先とされるべき課題は「安定した経済の発展と成長」である。失業の恐れを前面に押し出すことにより、有害汚染物質の排出基準や監視体制が緩和される。食品中に残存するある種の有毒物質については、それがもつ経済的有用性のために追及されず、調査の対象ともならない。つまり、法的には存在しないものと見なされて野放しにされてしまう。<sup>(18)</sup>

## 8. 世界社会というユートピア

### (1) 危険の共有関係における政治的な真空状態

近代化の過程でリスクの可能性が増大する。このことが「世界社会というユートピア」(Utopie der Weltgesellschaft)を一段とリアルなものとし、また少なくとも緊急を要するものとする。人類は今日、そして将来も、言わば「文明の黙示録的災禍」に怯えながら、自らが招いたリスクに対する解決策を、あらゆる境界を越えたところに見出し推進していかなければならない。このような傾向へのインパクトは、今日すでに感じ取ることができる。「環境問題が実質的に有意義に解決されるのは、ただ国境を越えた交渉や国際的な協定におけるよりほかにない。環境問題を解決する道は、したがって軍事同盟の枠を越えた会議や話し合いをもつことにつながる」。<sup>(19)</sup>

このことからベックによれば、リスク社会にはこれまでに見られなかったような新しい「危険の共有関係」(Gefährdungsgemeinsamkeit)が生まれる。ただしこの危険の共有関係がどのような政治的力をもつかについては、まだ全く明らかではない。まぎれもない事実として挙げられるのは、この新しく生まれた危険の共有関係なるものが、これまでのところ政治的にも組織的にも完全な真空状態を漂っているということである。つまり、この危険の共有関係は、民族国家的な利己主義とも、産業社会内部で支配的な政党集団や利益団体とも衝突する。多くの団体からなる社会のなかでは、こうした集団の境界を越えた地球規模のリスクを取り扱うための場所がない、ということである。

### (2) 困窮によって生じた連帯から不安によって生じた連帯へ

階級社会からリスク社会へと移行する場合、共有という関係の「質」も変化し始めるという。図式的に言えば、「二つのタイプの近代社会」には、それぞれ全く異なる二つの価値体系が現れる。階級社会の発展を担うダイナミズムは「平等」(Gleichheit)という理想とつねに関わっている。リスク社会の基礎となり原動力となる規範的な対立概念は「安全」(Sicherheit)である。階級社会における「不平等社会」の価値体系に代わって、リスク社会においては「不安社会」の価値体系が現れる。「平等」というユートピアは、社会を変革するという積極的な目標で満たされている。「安全」というユートピアは消極的・防衛的である。ここでは基本的に、良い物を

獲得することが問題なのではなく、最悪の事態を避けることだけが問題である。階級社会の夢とは、すべての人々がケーキの分け前に与ることを欲し、また与るのが当然だというものである。リスク社会の目標は、すべての人々が毒物の被害から免れて然るべきだというものである。

したがって、階級社会とリスク社会とは、人々が置かれている状況や手に手を取り合う状況、つまり人々を動かしたり、引き離したり、また緊密にしたりする社会的状況が根本的に異なる。階級社会の原動力を「私は空腹だ」(Ich habe Hunger!)という言葉に要約できるとしたら、リスク社会の原動力は「私は不安だ」(Ich habe Angst!)という言葉で表現できるであろう。階級社会における「欠乏の共有」に、リスク社会の「不安の共有」が取って代わる。要するに、「リスク社会という社会類型は、不安からの連帯(Solidarität aus Angst)が生じ、それが政治的な力となるところの社会の一段階を特徴づけている」。(20)

## 9. おわりに

バックが説く「リスク」と「リスク社会」について、その要点をテーゼ風にまとめて小論の結びとしたい。

### (1) リスクについて

第一にリスクは、例えば大気汚染や有害物質の越境移動などの場合のように、近代化と産業化のプロセスが進展する中で、システムの・副作用的に生産され拡大するものである。第二にリスクは、例えば放射性廃棄物や化学物質の濃度などの場合のように、感覚的に知覚できず、科学的な解釈によってしか認識できない。第三にリスクは、例えば地球温暖化やオゾン層の破壊などの場合のように、全世界、生命体、生態系にグローバルな規模で危害を及ぼす。第四にリスクは、例えば国際紛争や金融危機などの場合のように、生活や健康に対してだけでなく、政治的・経済的に利益や所有に対しても損害を与え、その価値を取用する。

### (2) リスクと科学について

第一にリスクは、科学的・理論的に因果性が推定されることによってリスクとして確認される。第二にリスクは、社会的・規範的に危険性が評価されることによってリスクとして確認される。第三にリスクは、「科学的合理性」と「社会的合理性」の対立の中でリスクとして定義される。第四にリスクは、対立し合って多元化・相対化する中で、各自の利害関心に基づいてリスクとして定義される。つまり、何かをリスクとして定義することでどれだけ社会的な影響を及ぼすかは、どれだけ科学的に裏付けられたかということには必ずしも拠っていない。

### (3) リスクと階級について

第一に、富の分配とリスクの分配は階級的図式に従っている。ただし、富は上層に集中するが、リスクは下層に集中する。第二に、貧困は階級的であるが、スモッグは民主的である。つまり、リスクが拡大すると社会的格差は相対的なものになる。第三に、リスクは拡大する過程で「ブーメラン効果」を発揮する。リスクはあらゆるものを一括して無差別に巻き込んでしまう。第四に、豊かな国々は貧しい国々にリスクを移転させ、国際的規模の社会的不平等を発生

させる。しかしリスクは結局、ブーメラン効果によって豊かな国々へと跳ね返って来る。

#### (4) リスク社会について

第一に、階級社会とリスク社会は近代社会の二つの類型である。階級社会が産業社会、市場社会であるとするれば、リスク社会はメディア社会、情報社会であると言える。第二に、階級社会においては存在が意識を規定するが、リスク社会においては意識が存在を規定する。リスクをめぐる知識が政治的意味を獲得する。第三に、階級社会の理想は「平等」であり、その原動力は「困窮」であるが、リスク社会の理想は「安全」であり、その原動力は「不安」である。第四に、階級社会における「困窮の共有」「困窮から生ずる連帯」は、リスク社会において「不安の共有」「不安から生ずる連帯」へと移行する。第五に、リスク社会における新たな「危険の共有関係」は、国境を越えた「世界社会」というユートピアを予感させるが、この共有関係がどれだけの政治的力をもつかは未知数である。

地球温暖化、放射能汚染、有害化学物質の越境移動、生物多様性の危機……。人類は近代化を推し進める中で物質的豊かさを手に入れたが、その見返りとして手に負えないようなリスクを背負い込んだ。ここにリスクとは、近代化の副産物、言わば人類が自ら蒔いた種である。この近代化と産業化の発展に伴うリスクが、いまや地球規模で生命を危険に曝し、生活環境や文明社会を脅かしている。私たちは高度経済成長期以降、階級社会からリスク社会への転換期に突入した。そして東日本大震災と福島第一原発事故を経験した私たちは、なおいっそうベックのリスク社会論に学ばねばならないであろう。

#### 【注】

- (1) 日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善、2010年、228頁。
- (2) Ulrich Beck, *Risikogesellschaft. Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main (Suhrkamp Verlag), 1986. ウルリヒ・ベック著(東廉/伊藤美登里訳)『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局、1998年。
- (3) Ulrich Beck, *Risk Society. Toward a New Modernity*, translated by Mark Ritter, London (SAGE Publications), 1992, p.1.
- (4) Dirk Kaesler (Hrsg.), *Aktuelle Theorien der Soziologie. Von Shmuel N.Eisenstadt bis zur Postmoderne*, München (Verlag C.H.Beck), 2005, S.268-269.
- (5) 『危険社会』462-463頁。
- (6) ①-1 : *Risikogesellschaft*, S.35. 『危険社会』35頁。  
①-2 : Ibid, S.59. 上掲書67頁。  
②-1 : Ibid, S.30. 上掲書30頁。  
②-2 : Ibid, S.64. 上掲書73頁。
- (7) Ibid, S.27. 上掲書26頁。
- (8) Ibid, S.25-31. 上掲書23-31頁。
- (9) Ibid, S.31-35. 上掲書31-35頁。
- (10) Ibid, S.40. 上掲書41頁。

- (11) Ibid, S.62. 上掲書70頁。
- (12) Ibid, S.42. 上掲書44頁。Ibid, S.35-45. 上掲書35-48頁。
- (13) Ibid, S.46-47. 上掲書48-51頁。
- (14) Ibid, S.48. 上掲書51頁。
- (15) 1984年、インドのマーディヤ・プラデーシュ州ボパール（Bhopal）で発生した史上最悪の化学工場事故。アメリカのユニオンカーバイド社現地資本が、セヴィンと呼ばれる殺虫剤を生産する際に使用するイソシアン酸メチルの有毒ガスにより工場周辺のスラム街や人口密集地区を汚染した。この事故による死者は1万5000人以上、被害者は50万人以上にのぼるとされ、いまでも事故現場の汚染の除去も被害者への公正な補償もなされていないという。
- (16) Ibid, S.55. 上掲書60頁。
- (17) Ibid, S.48-58. 上掲書51-66頁。
- (18) Ibid, S.59-61. 上掲書66-69頁。
- (19) Ibid, S.63. 上掲書72頁。
- (20) Ibid, S.66. 上掲書75頁。Ibid, S.61-66. 上掲書69-76頁。

(平成25年11月6日受理)